

# 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 20

—平成17年度—

2006

香芝市教育委員会

## 序 文

香芝市は奈良県の北西部、古代から穴虫越えや閼屋越えが通じ、大和と河内を結ぶ交通の要衝、そして、『万葉集』にもうたわれた二上山の麓に位置します。この二上山からはサヌカイトや凝灰岩、ざくろ石などが産出し、これらの石はそれぞれの時代において盛んに利用され文化の発展に寄与しました。

サヌカイトは2万年前の旧石器時代からおもに石器の素材として、凝灰岩は古墳時代以降に石棺や寺院や宮殿の基壇、さらには石仏や石塔などにも使われました。そして、ざくろ石は明治以降に研磨材などに使われ、近代産業の発達に大きく貢献しました。

さて、今回報告する尼寺廃寺は、平成3年度から範囲確認調査を行い東向きの法隆寺式伽藍配置であったことが確認された遺跡です。この間、平成8年4月には塔跡から現存するものとしては日本最大の心礎とその柱座から耳環や水晶玉などの舍利莊嚴具がみつかり、一躍全国的にその名が知られることになりました。そして、平成14年3月19日付けで国史跡に指定されました。その後、香芝市としては尼寺廃寺を保存するために整備計画を立て、平成15年度から国と県の補助を受けて地権者のご理解により整備事業用地の買収を始め、昨年度からは史跡整備検討委員会を発足して具体的な整備計画をすすめております。

今回は整備事業をすすめるにあたり、回廊北側に遺構があるかどうか確認するため移転された家屋の跡地を中心に調査しました。この調査を契機に尼寺廃寺の整備事業が円滑にすすむことを願い、皆様方のご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

香芝市教育委員会  
教育長 山田 勝治

## 例　　言

1. 本書は、平成17年度において香芝市教育委員会が国庫・県費補助事業（事業名：史跡尼寺廃寺跡等・登録記念物保存修理事業）として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は香芝市が事業主体となり、香芝市教育委員会事務局生涯学習課が実施した。
3. 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録、および出土遺物は香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17番17号）で保管している。
4. 本書に掲載した実測図の水準は海拔高であり、座標値は既刊行の『尼寺廃寺I』との整合性のため旧座標値（国土地理院第IV座標系）による。
5. 発掘調査作業及び遺物整理作業は安西工業㈱に委託した。

## 目　　次

調査位置図	ii
尼寺北廃寺	1
I 遺跡の環境	1
II 遺跡の概要と既往の調査	2
III 調査の概要	4
1 調査の目的	4
2 調査の概要と検出遺構	4
(1) Aトレーナ	4
(2) Bトレーナ	5
(3) Cトレーナ	6
(4) Dトレーナ	6
(5) Eトレーナ	7
(6) Fトレーナ	7
3 出土遺物	8
(1) 軒瓦	8
(2) 鬼瓦	9
(3) 鳩尾	9
(4) 鳥羽瓦	10
(5) 塚	11
(6) 土師皿	11
(7) 杯蓋	11
V まとめ	11



第1図 調査位置図 (S=1/50,000)

平成17年度史跡尼寺廃寺跡史跡等・登録記念物保存修理事業に伴う調査地

遺跡名	調査次数	調査地番	調査期間	調査面積
尼寺北廃寺	第24次	尼寺2丁目68, 72, 69-1, 69-2	平成18年1月10日～3月23日	296 m <sup>2</sup>

## 尼寺北廢寺

### I 遺跡の環境

尼寺廃寺は奈良県香芝市尼寺の北部、王寺町との境に所在する飛鳥時代から白鳳時代に創建された南北2つに分かれる寺院跡である。周辺の遺跡をみると、まず、尼寺廃寺の南を流れる尼寺川を隔てた丘陵の北斜面には5基からなる平野窯跡群がある。この窯跡群は戦密には1～3号窯と同じ丘陵にあり、4・5号窯は1～3号窯がある丘陵から北東へ約80m隔てた小高い丘陵に存在する。1号窯は須恵器を焼成した地下式の有段窯で、2・3号窯も試掘調査で須恵器を焼成した窯であることが確認されたが、保存が決まったため本調査されなかった。4号窯も須恵器を焼成した窯で、出土した須恵器から1号窯とほぼ同じか若干さかのほる時期と考えられており、1・4号窯とも6世紀後半～7世紀初頭に操業したとされている。5号窯は瓦を焼成した窯で、軒瓦は出土していないが位置的に尼寺廃寺に供給されたと考えられている。この平野1～3号窯がある同じ丘陵の南斜面には7世紀初頭から7世紀末にかけて造営されたと考えられる平野古墳群がある。平野古墳群は6基からなり、東から1号墳（車塚古墳）、2・4・3号墳（4・3号墳は消滅）、塚穴山古墳で、塚穴山古墳の南側にもう1基存在したと考えられるが、すでに破壊されており石室を構築していたと考えられる巨石が地元で「七ツ石」と呼ばれて付近に点在している。1号墳は一辺約20m、高さ約3.5mの方墳と推定されていたが、平成11年度の測量調査で直径約24～26mの円墳の可能性が高まっている。横穴式石室が南に開口しており、玄室は比較的面の整った花崗岩の巨石を横位に使って2段積みで構築され、2石目はやや内側へ内傾させて持ち送り、天井は2枚で架構している。羨道は花崗岩の巨石を縱位にならべておらず、石室の形態などから7世紀前半に築造されたと考えられている。2号墳は平成11・12年度の調査で直径約26m、高さ約6.5mの円墳で南に開口する横穴式石室が確認された。玄室・羨道とも花崗岩の巨石を縦位に立て、玄室奥壁は2石を横積みにして構築する。玄室は全面に凝灰岩の切石を敷き詰め、中央部のみ上と凝灰岩の碎片で長方形に堅く突き固められた部分があり、この部分に棺を置いたと考えられ、調査では棺を置いたと考えられる壇と棺の受台が出土している。3・4号墳は昭和37年頃からの上取りで破壊された。しかし、3号墳は付近に散乱する凝灰岩の切石から小規模な横口式石槨と考えられ、4号墳は花崗岩の石材があつたらしいが詳細は不明である。塚穴山古墳は一辺18m、高さ約4mの方墳と推定され横口式石槨が南に開口している。昭和47年の調査で石槨内から耳環1点や中空玉1点、銅鏡と推測される銅製品の破片、そして、夾紗棺の破片などが出土している。石槨の形態は百濟後期の王陵とされる扶余陵山里古墳群の車下塚古墳との類似性が指摘されている。もう1基の古墳は地元に残された江戸時代後半に描かれたと考えられる『平野村絵図』に「岩屋」と記された石室状の構築物があり、付近に地元で「七ツ石」と呼ばれる巨石が点在することから横穴式石室が存在したと考えられるが詳細は不明である。

この平野窯跡群と古墳群は同じ丘陵に造営されていることから密接な関係があると考えられ、平野窯跡群で焼成された瓦が尼寺廃寺へ供給された可能性が高いことから、尼寺廃寺の造営者が窯と古墳群の造営に関わったと推測される。

次に、尼寺廃寺の北約1.7kmには片岡王寺（放光寺）がある。この地域ではもっとも早く7世

紀前半に創建された寺院であり、「放光寺古今縁起」によれば、敏達天皇の第三皇女の片岡姫が嘗んだ片岡宮を寺に改めて片岡寺と称したことに始まる。明治20年頃までは基壇が遺存しており、南向きの四天王寺式伽藍配置と推定されている。調査で尼寺北廬寺の回廊所用瓦と同範の均整唐草紋軒平瓦が出土している。この片岡王寺の瓦を焼成した窯は片岡王寺の南東約800mに位置する柴井滝ノ北遺跡と考えられている。かつてこの付近で片岡王寺と同範の軒瓦が採集されており、平成15年度の調査では灰原が検出され長屋王跡と同範の軒平瓦が出土している。

この柴井滝ノ北遺跡の西側には滝川が北流しているが、遺跡の北西あたりで尼寺廬寺の東側を北流する葛下川と合流する。この柴井滝ノ北遺跡から滝川を約1.1kmさかのぼると下牧瓦窯跡があり、平成16年度の調査でこの付近からも長屋王跡と同範の軒平瓦が出土している。さらに、滝川を約2.2kmさかのぼった東側丘陵には敏達天皇の皇子である押坂彦入大兄皇子の墓とされる牧野古墳が所在する。このことから、この地域一帯に敏達天皇系の王族が進出していたことがうかがえる。

## II 遺跡の概要と既往の調査

尼寺廬寺は古くから尼寺の集落内で古代の瓦が多数出土し、現在もいたるところで散見できることから寺院跡の存在が考えられてきた。しかし、礎石が残る基壇が南北約200m離れて存在することや、南と北のほぼ中央付近に谷が存在することなどから、南北2つに分かれる寺院跡と考えられてきた。

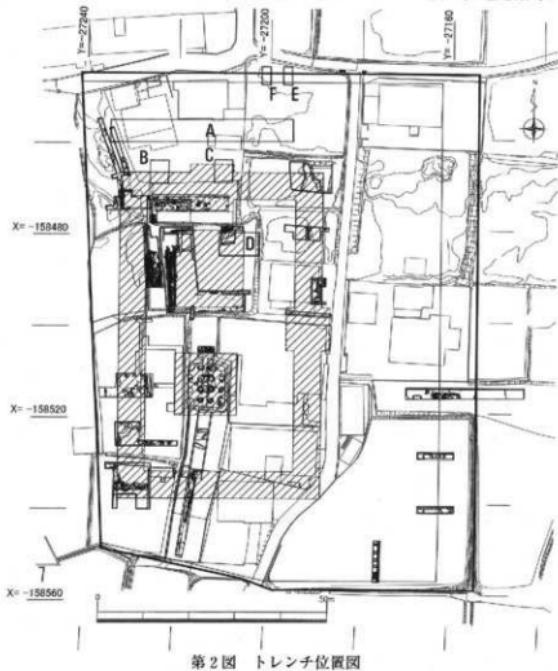
まず、北の地域には一辺10mほどの方形墳状の高まりがあり、礎石と考えられる石の一部が露出していた。この土壇を中心には多数の瓦が分布しており何らかの堂宇の基壇であった可能性が考えられていた。

一方、南の地域は役行者をまつる柴師堂に礎石が数個残っており、地元でドヤマ（堂山）と呼ばれていることから、ここも何らかの堂宇の基壇と考えられてきた。このドヤマの西約50mにある般若院の境内では軒瓦を含む大量の瓦が散乱している状態であった。しかし、ドヤマと般若院の位置関係から一つの伽藍を想定するには無理があり、その関係解明も大きな課題であった。また、般若院の西約60mの丘陵にある厨神社境内の北斜面には登窓の断面が露出している。

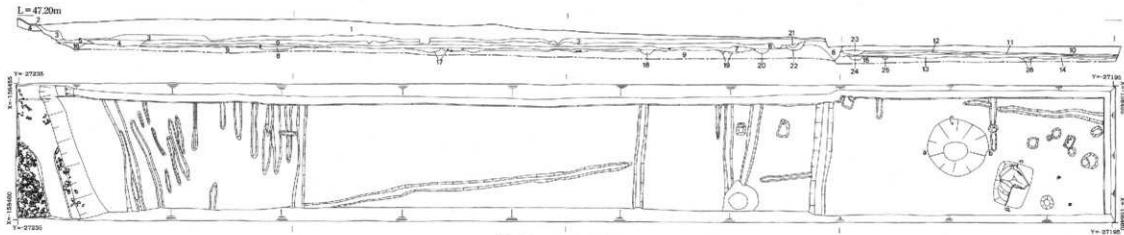
そこで、実態不明な寺院跡を解明するため、平成3年度から9年度までおもに国庫・県費補助事業による範囲確認調査を継続して実施した。平成3年度は北の地域で礎石が残る基壇の西側を調査し、基壇の西端を検出するとともに初めて回廊と考えられる遺構が確認された。そして、平成6年度には基壇の北約10mの畑地を調査し、焼け落ちた状態で南北にのびる瓦の堆積と雨落ちが検出された。これにより、南の基壇がほぼ正方形であることから塔跡と考えられ、検出した雨落ちからこの建物が南北棟の可能性が高く金堂と推測されることから東向きの法隆寺式伽藍配置と想定されるにいたった。次に、平成7年度は塔跡と推定されていた基壇を調査し、推定通り塔跡と確認するとともに、現存するものとしては日本最大の心礎が検出され、その柱座から耳環12点や水晶玉4点などの舍利莊嚴具が出土し、さらに、塔基壇構築法がはっきりするなど多大な成果があった。この塔跡の調査以降、尼寺廬寺の重要性が指摘されるようになり、保存に向けての範囲確認調査が急がれることになった。その後、平成9年度にはこれまで未確認であった東面回廊と寺域の南限を画すと考えられる築地状の遺構を検出し、東限についても地業を検出したこと

からほぼ寺域と東向きの法隆寺式伽藍配置であったことが確認された。しかし、中門が未確認であることなどの理由から保存策が進まなかったため、平成12年度には東面北回廊が中門にとりつくと推定される位置で個人住宅の建替えが計画された。そのため、事前に発掘調査を実施したところ、ほぼ推定通りの位置で回廊幅より広い版築（基壇）が検出されたことから中門と推測され、これにより東向きの法隆寺式伽藍配置が確定した。

一方、南の地域では平成13年度の調査でドヤマの東側から斑鳩寺の創建瓦の1つである軒平瓦（斑鳩寺213B）や范傷の少ない坂田寺式軒丸瓦が出土するなど、北庵寺より創建がさかのばる可能性のある遺物が出土した。そして、平成14年度にはドヤマを調査し、焼失した痕跡を検出した。さらに、平成14・15年度には般若院境内を調査して東西方向にならぶ2つの基壇を検出した。この基壇の規模と周辺の地形等から南向きの法隆寺式伽藍配置であったと考えられ、般若院を中心にして伽藍が存在したことが判明した。しかし、ドヤマとの関係は不明のままであるが、ドヤマの東側で斑鳩寺の瓦が出土していることから、般若院に先行する堂宇であったと推測される。そして、平成16年度には基壇が検出された般若院の北西において個人住宅が計画され、また、般若院の南東においても範囲確認調査として寺域確認のため調査した。しかし、回廊や築地など寺域を画する施設は検出されなかった。なお、これまで般若院周辺においては個人住宅建築等に伴う小規模

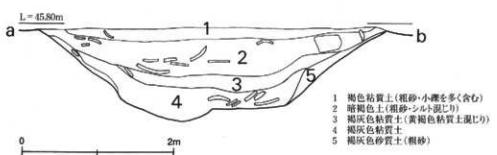


第2図 トレンチ位置図

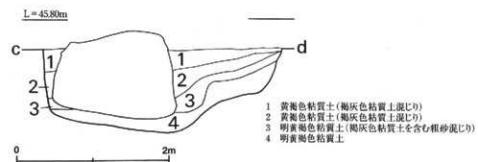


第3図 A1レンチ実測図

- |                           |                            |                         |                  |
|---------------------------|----------------------------|-------------------------|------------------|
| 1 深土(コンクリート塊含む)           | 8 灰褐色砂質土(灰黄色粘質土ブロックを少量含む)  | 15 にぶい黄褐色粘土(地山)         | 23 灰色砂質土         |
| 2 黒褐色土上(黒褐色粘質土ブロック含む)     | 9 にぶい黄褐色粘質土(後黄色粘質シルトととの互層) | 16 黄褐色粘土(後黄色粘質シルトととの互層) | 24 灰色砂質土(マンガン含む) |
| 3 黑褐色粘質土(灰色粘質土ブロック含む)     | 10 黒色土(耕作土)                | 17 黄褐色砂質土(薄い)           | 25 灰褐色砂質土        |
| 4 にぶい黄褐色粘質土(灰色粘質土との互層)    | 11 にぶい黄褐色粘質土               | 18 にぶい黄褐色砂質土            | 26 灰色砂質土         |
| 5 灰色砂質土                   | 12 黄褐色粘質土                  | 19 灰黄褐色砂質土              |                  |
| 6 灰色砂質土(黄褐色砂質土ブロック含む)     | 13 にぶい黄褐色砂質土               | 20 にぶい黄褐色砂質土(マンガン多量に含む) |                  |
| 7 灰色砂質土(灰褐色砂質土ブロックを多量に含む) | 14 黄褐色砂質土                  | 21 灰色砂質土(黄褐色砂質土ブロック含む)  |                  |
|                           |                            | 22 黄褐色砂質土               |                  |



第4図 SK-01断面図



第5図 碓石土坑断面図

な調査や範囲確認調査も実施してきたが、般若院境内とドヤマ以外は寺院に関係する遺構は検出されていない。また、これまで地割から回廊や築地の存在が推定される位置を重点的に調査してきたにもかかわらず、出土した瓦の量は調査面積に対して少ない。このことから、回廊が存在しなかった可能性が高く、簡易な塀で寺域を廻していたのかも知れない。また、伽藍推定地の東から南東においては、民間の開発事業に伴って大規模な調査を実施している。その結果、多数の掘立柱建物跡や井戸などが検出された。これらの遺構は南遺跡の寺院を造営した集団、あるいは寺院に関連する集団の建物群等の可能性が想定されている。

### III 調査の概要

#### 1 調査の目的

今回の調査は史跡尼寺跡の整備事業に向けてのデータを得ることを目的に実施した。平成17年11月8日付けで現状変更等許可申請書を提出し、平成17年12月19日付けで許可された（17委庁財第4の1332号）。調査は北面回廊北側など未確認の部分を中心にトレンチを設定した。

調査区は北面回廊北側から寺域北限までの南北約20mの空間における遺構の有無、北面回廊北側、および金堂東側、そして、寺域北限の施設（築地）を確認するためトレンチを設定した。

#### 2 調査の概要と検出遺構

##### （1）Aトレンチ（第3図）

この調査区は北面回廊北側に設定した。北面回廊から寺域北限推定地まで南北約20mの空間があり、未確認の講堂の存在が想定される位置である。

西端で平成9年度に掘削したトレンチの一部にかけて過去の調査データと比較できるように、北面回廊と寺域北限推定地のほぼ中央に幅5m、東西40mのトレンチを設定した。設定したトレンチ内には隣地との境界にコンクリート製の擁壁が残っていたことから重機で表土（盛土）及び第2層（旧耕作土）まで掘削し、遺物が出土する第3層以下についてはトレンチ北側で排水のための側溝を掘削しながら壁面で遺物や土層の堆積状況を確認しつつ人力で平面を掘り下げた。

その結果、調査地西側では住宅を建築する際の基礎工事のため旧耕作土を一部除去して約0.8mの盛土があり、平成9年度の調査で同廊北西隅から続いている瓦堆積から約0.7m下まで搅乱されていた。しかし、搅乱土を除去すると素掘小溝や寺院造営時の整地上が検出されたことから、素掘小溝の時期にはすでに削平されていたと考えられる。また、寺院造営時の整地土は瓦を含む粘質土でトレンチ西端から約2mの位置から堆積しており、この位置はすでに平成9年度の調査トレンチのレベルから約0.8m低いことから、旧地形も段差があった可能性が考えられる。

トレンチ西端では平成9年度に掘削したトレンチの両側で瓦堆積を検出した。そして、トレンチのほぼ全幅で東西および南北方向に走る素掘小溝、そして、ピット数基、トレンチ東側で円形の土坑と礎石1個を検出した。

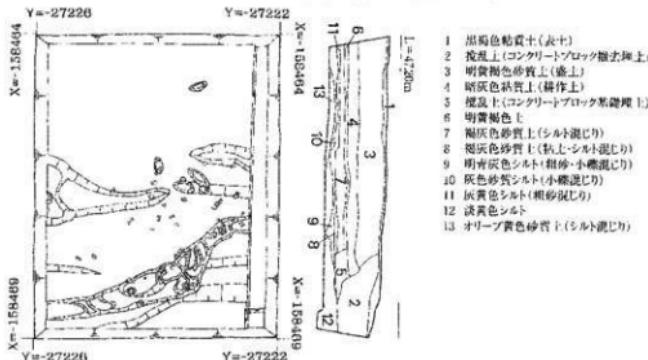
土坑（SK-01）は南北約2.15m、東西約2.3m、深さは約1.2mのすり鉢状を呈し、軒瓦を含む瓦片や最大で人頭大の石などが出土した。

礎石は1.15m×0.8mで、南南西から北北西の方向に1.25m×1.6m、深さ約0.55mの掘り方が検出された。しかし、土坑を断ち割りして断面を観察したが、掘えたというよりも落とし込んだ状況であった。なお、礎石の中心からトレンチ北端まで3.4m、東端まで3.6mあることから、もし

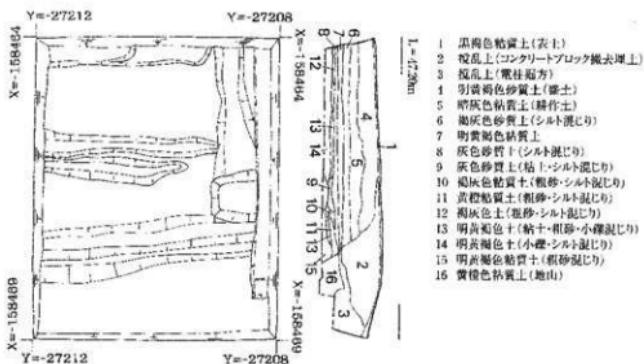
仮に建物の礎石として据えられたとすれば、他の礎石や抜き取り穴が検出されるはずであるが、まったくその痕跡がなかった。また、礎石の中心から北面回廊北端までは約6.7mであることから、他の礎石がトレンチ外に存在するすれば柱間が4mをこえることになり、そうなれば北面回廊には軒が接してしまうことになる。このことからも据えられた礎石ではないと言えるだろう。

#### (2) Bトレンチ（第6図）

北面回廊北端を確認するため回廊北西隅から約7m東の位置に東西4m、南北5mのトレンチを設定した。このトレンチではトレンチ北端から約1mの位置で北面回廊北端、そしてトレンチのほぼ中央で礎石が検出されるはずであった。しかし、堆積していた住宅建築時の盛土や臼耕作土、そして、整地土を除去した時点では山となり、整地土中においてもほとんど瓦が出土しなかった。また、平成9年度に検出した回廊の面から約0.8m低いことから、回廊および礎石についてはすでに礎石埋付穴の底まで削平された可能性が高いと考えられる。



第6図 Bトレンチ実測図



第7図 Cトレンチ実測図

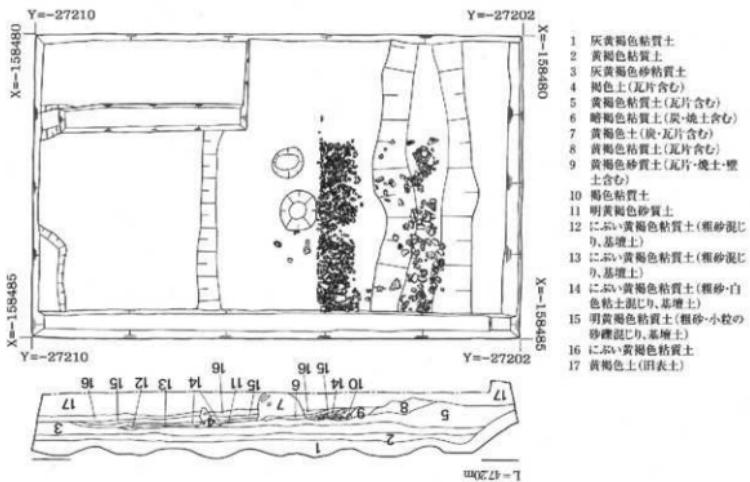
### (3) Cトレンチ (第7図)

このトレンチも北面回廊北端を検出するため、回廊北西隅から約20m東の位置に東西4m、南北5mのトレンチを設定した。このトレンチにおいてもトレンチ北端から約1mの位置で北面回廊北端とトレンチのほぼ中央で礎石が検出されるはずであった。しかし、Bトレンチと同じで整地土を除去した時点で地山となり、整地土中においてもほとんど瓦が出土しなかった。レベルはBトレンチとほぼ同じであった。したがって、このトレンチにおいてもすでに遺構が削平されたと考えられる。

### (4) Dトレンチ (第8図)

金堂東端を確認するため東西8m、南北5mのトレンチを設定した。このトレンチを設定するにあたっては、平成8年度において金堂北東部分を調査して北側雨落ちとトレンチ南側で旧地表面から直接版築された基壇土を検出していることから、このトレンチに一部重複させてトレンチを設定し、版築土の広がりも同時に確認することにした。なお、平成6年度の調査で金堂南東部分を調査したが、雨落ち等は搅乱のために検出できなかった。しかし、一段低くなる部分があつたことから金堂の東西幅を14.8mと推定していた。

まず、トレンチ北西隅部分を掘削して平成8年度のトレンチを再発掘し、そのトレンチの南壁面にみえる版築土の広がりを確認しながら掘削した。その結果、版築土はトレンチ西側ではほぼ全面にわたって検出された。そして、トレンチ南側で側溝を掘削して堆積を確認したところ、トレンチ西端から4.6mの位置で幅約0.6mにわたってバラスの堆積が確認された。そこで、トレンチの平面でバラスを慎重に検出したところ、トレンチ南端から約3.2m続いていた。このバラスについては西側と北側で検出したものと同じであることから、これが金堂東側の雨落ちであるこ



第8図 Dトレンチ実測図

とは確實であろう。この結果、西側雨落ちとの距離は14.7mであることから、ほぼ当初の推定通りの数値となり金堂が南北棟であったことが追認された。しかし、基壇外装は検出されなかった。このバラスに混じって川原寺式に分類される複弁8弁蓮華紋軒丸瓦の破片が出土した。この軒丸瓦は焼け落ちた状態と言うより明らかに雨落ちとして敷き詰められていた。したがって、この雨落ちは創建当初のものではなく改修に伴うものと考えられる。

なお、雨落ちの西約10~30cmのところで土師皿が3点以上出土した（第12図5~7）。この位置は基壇外装が凝灰岩の壇上積であったとすれば延石が据えられるところである。地鎮であればピットに埋納されると考えられるがその痕跡はまったくなかった。したがって、この時期に金堂が焼失した可能性が高いと考えられる。

#### (5) Eトレレンチ（第9図）

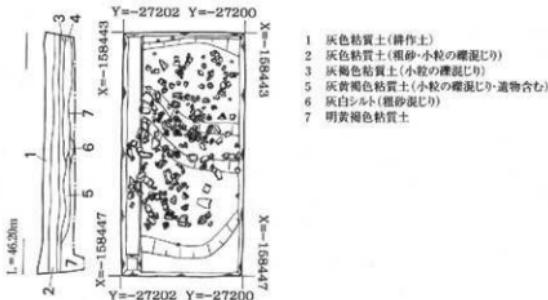
寺域北限の施設を確認するため、2m×4mのトレレンチを南北方向に設定した。その結果、トレレンチ北端から幅約0.4m、高さ約0.2mの高まりが検出され、その南側で東西方向に幅約1.2mの溝が検出された。この溝からはNKH10に相当する均整唐草紋軒平瓦1点を含む瓦片のはか土師器片等の遺物が出土した。この状況から北端で検出した高まりが築地の南端と考えられ、築地に葺かれていた瓦が溝に落下したと推測される。



第9図 Eトレレンチ実測図

#### (6) Fトレレンチ（第10図）

Eトレレンチ北端で検出した高まりと溝の続きを確認するため、Eトレレンチから西へ3mの位置で2m×4mのトレレンチを南北方向に設定した。その結果、トレレンチ北端で幅0.1~0.3mにわたって高まりが検出され、その南側で幅0.8~1.6mの溝が検出された。そして、この溝の南側で搅乱と考えられる不整形な落込みが検出された。この溝や落込みからはNKH2に相当する川原寺式に分類される複弁蓮華紋軒丸瓦、NKH7に相当する偏行唐草紋軒平瓦、そして、NKH4に相当する型押しの重郭紋軒平瓦が1点ずつ、さらに、瓦当が剥離しているがNKH12に相当すると考えられる三重圓紋軒丸瓦2点を含む軒瓦のはか須恵器片や土師器片、黒色土器片等の遺物が出土した。



第10図 Fトレント実測図

### 3 出土遺物 (第11・12図)

#### (1) 軒瓦 (第11図1~16)

1~4は中房に1+7+13の蓮子を配す川原寺式に分類される複弁蓮華紋軒丸瓦でN KM 3に相当する。1・3はAトレントのSK-01から、2・4はAトレント西端から出土した。

5・6も川原寺式に分類される複弁蓮華紋軒丸瓦でN KM 4に相当し、中房の蓮子が1+7+12で1~4に比べ蓮弁が平坦である。5はAトレントのSK-01から、6はAトレント西端から出土した。その他、Dトレントの金堂東側雨落ちから1点、そして、雨落ちのバラスに混じって1点出土している。ただし、雨落ちのバラスに混じって出土したものは、取り上げに際して遺構を破壊しなければならなかつたことからそのまま埋め戻した。

7は中房に1+5+9の蓮子を配す複弁蓮華紋軒丸瓦で、6276型式G種に分類されN KM 5に相当する。Aトレントの整地土から出土した。

8は中房に1+8の蓮子を配す单弁12弁蓮華紋軒丸瓦でN KM 6に相当する。Aトレントの整地土から出土した。

9は破片であるが中房に1+8の蓮子を配す单弁16弁蓮華紋軒丸瓦でN KM 8に相当する。これもAトレントの整地土から出土した。

10は中心に1点の珠点を配す三重巻紋軒丸瓦でN KM 12に相当する。Dトレントの金堂東側から焼け落ちた状態で出土した。

11は右巻きの三巴紋軒丸瓦でN KM 21に相当する。Aトレントの整地土から出土した。

12は型押しの重郭紋軒平瓦でN KH 4に相当する。AトレントのSK-01から出土した。

13・14は珠紋縁の均整唐草紋軒平瓦でN KH 9に相当する。この瓦の凸面には瓦当から約8cmの位置に朱線が残り、瓦当の左右側面および瓦当にも側面から約3cmの位置までベンガラが付着している。13はAトレントのSK-01から、14はAトレントの整地土から出土した。

15・16も珠紋縁の均整唐草紋軒平瓦でN KH 10に相当する。AトレントのSK-01から出土した。なお、Eトレントからも1点出土している。

(2) 鬼瓦 (第11図17)

Dトレンチの金堂東側の雨落ちから出土した。南都七大寺式に分類され、大安寺などから出土しているIV式に類似している。厚さ約3.5cmで珠紋を約1.2~1.5cmの間隔で配し、残存長は12.0cm、灰白色を呈し焼成は堅緻である。塔基壇西側における第1次調査で1点出土しているのみで、これで2点目となる。

(3) 鶴尾 (第12図1)

AトレンチのSK-01から出土した。基底部の破片で厚さ約5cm、外面はヘラナデにより調整され、内面は同心円の叩き、底部にはワラ座状圧痕が残る。平成7年度に塔基壇堆積土から出土した破片と同じで鶴尾1にあたる。

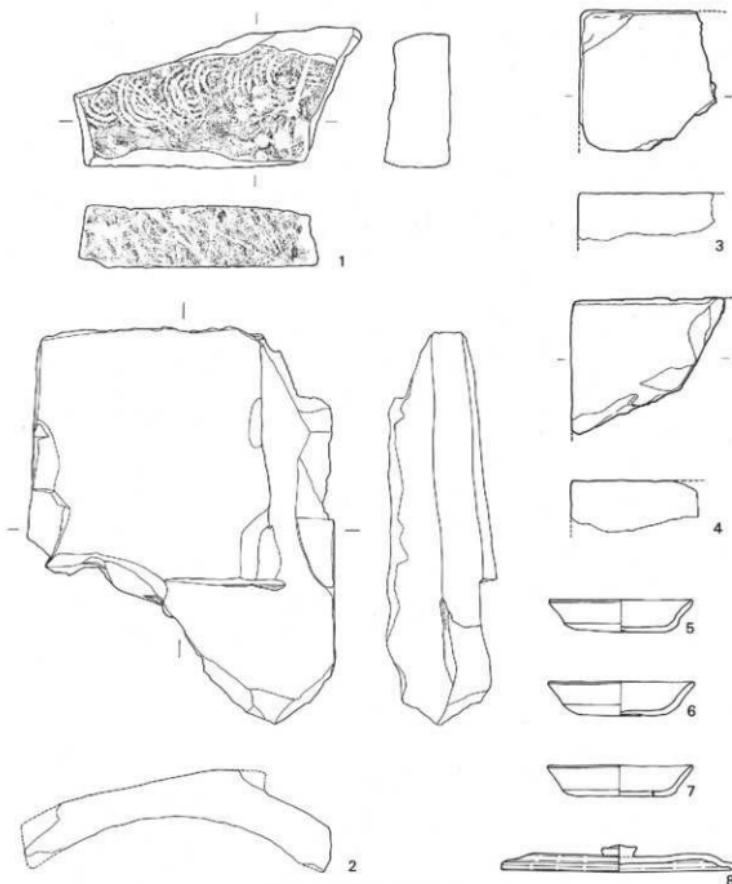


第11図 第24次調査出土瓦 (S=1/4)

(4) 蝶羽瓦 (第12図 2)

AトレチのSK-01から2点出土した。平瓦は一枚作りで凸面を繩叩きしたあとヘラでL字の段を削り出している。段は狭端側から広端側に向かって20.5cm、幅約8cmで段差は0.7~1.5cmを測る。瓦当は第11図13と同じ紋様が施紋されていたと考えられ、瓦当を手前にして凸面を上にした状態で見ると2点とも右に落ちている。

これまで6点出土しており、左に落ちるものと右に落ちるもののがそれぞれ3点ずつであった。



第12図 第24次調査出土瓦 (S=1/4)

### (5) 塙 (第12図3・4)

△トレンチのSK-01から数点出土した。3は残存長12.3cm、残存幅10.8cm、厚さ4.2cm、4は残存長11.2cm、残存幅11.4cm、厚さ3.8cmで、いずれも灰色を呈し焼成は良い。

### (6) 土師皿 (第12図5~7)

Dトレンチの金堂東側雨落ち付近で出土した。整地土を除去したところ、焼失当時の遺構面で出土した。5は口径11.6cm、器高2.6cm、6は口径11.8cm、器高2.8cm、7は口径11.8cm(復元)、器高2.5cm(残存高)を測り、内外面とも口縁はナデ調整、ほかはユビオサエのあとナデ調整を施す。

### (7) 杯蓋 (第12図8)

△トレンチ西端、平成9年度の14次-3トレンチ西側で出土した。須恵器杯蓋で直径19.0cm、器高2.2cmを測り、内外面とも丁寧なナデ調整を施す。

## IVまとめ

今回の調査で金堂東側の雨落ちが検出され、さらに、回廊北側の状況が判明した。

まず、金堂は東西14.8mと推定していたが、今回の調査で14.7mであったことが判明し、南北長が16.8mであることから南北棟であったことが確認された。

また、北面回廊北側については住宅建築時にかなりの擾乱を受けており、遺構はすべて削平されていた。しかし、地山直上で瓦を含む粘質土による整地土が検出されたことにより寺域内であったことは確実で、未確認の講堂が存在したかどうかについては不明である。そして、寺域北限と推定していた位置で築地らしき遺構が検出されたことにより、従来の推定通りの位置に築地が存在する可能性が高くなった。

今回の調査において講堂は確認できなかったが、金堂東側雨落ちと寺域北限において築地状の遺構を検出したことにより、整備に向けて重要な資料を得ることができた。

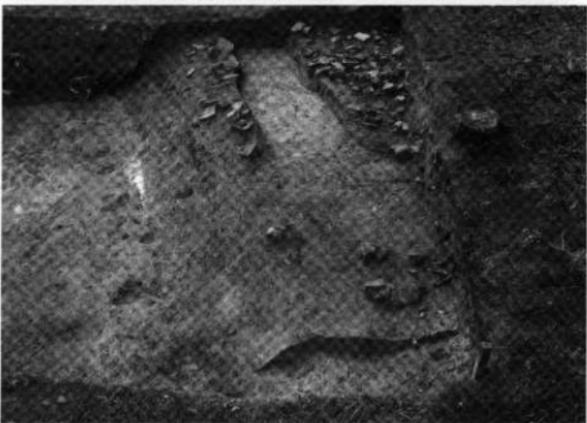
最後に、金堂雨落ち付近の整地土直下の遺構面から土師皿が出土した。出土状況から地鎮とは考えられない。したがって、この土師皿の時期に焼失したか大規模な再建が考えられる。しかし、雨落ちから川原寺式に分類される複弁8弁蓮華紋軒瓦(NKM4)や三重圓紋軒瓦が出土しており、これ以降の瓦が出土していないことからこの時期に焼失した可能性が高いと推測される。そして、雨落ちのバラスに混じて複弁8弁蓮華紋軒瓦(NKM4)があったことから、基礎の改修が行われた可能性が考えられ、この改修の時期に三重圓紋軒瓦が一部差し替えられたと考えられる。

## 参考文献

- 香芝市教育委員会編 1995 「香芝市埋蔵文化財発掘調査報告書3」香芝市教育委員会  
香芝市教育委員会編 1997 「香芝市埋蔵文化財発掘調査報告書7」香芝市教育委員会  
香芝市教育委員会編 1998 「香芝市埋蔵文化財発掘調査報告書9」香芝市教育委員会  
香芝市教育委員会編 2003 「尼寺鬼寺7」香芝市教育委員会  
香芝市教育委員会編 2005 「平野2号墳」香芝市教育委員会  
中井 公 1997 「大安寺式」軒瓦の年代」「堅田直先生古希記念論文集」堅田直先生古希記念論文集刊行会  
奈良市教育委員会編 1996 「平城京・藤原京街十軒瓦一覧」奈良市教育委員会  
吉村公男 2005 「奈井塚ノ北遺跡 舟戸・西隅遺跡」河合町教育委員会



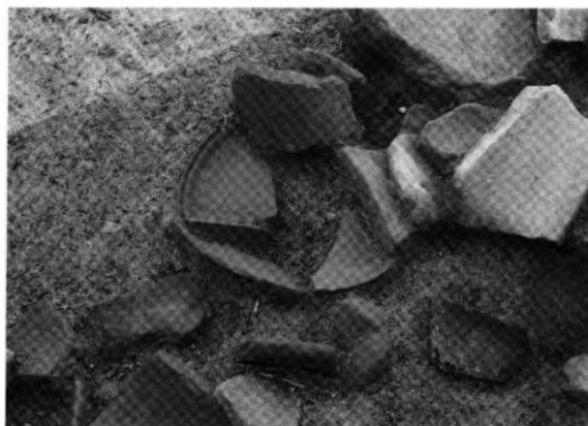
調査前（南西から）



トレンチ西端瓦検出状況（北から）



同（北東から）



トレンチ西端杯蓋出土状況  
(北西から)



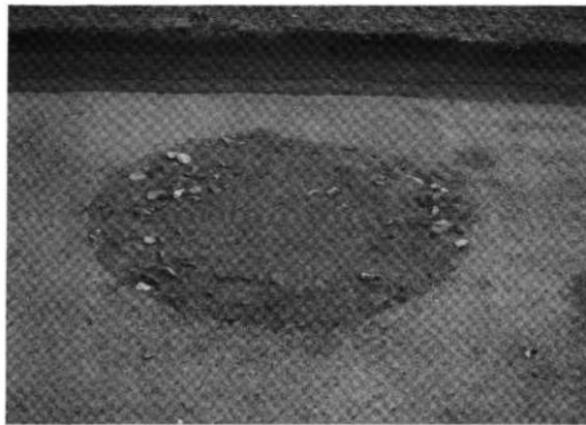
トレンチ中央部整地土の状況  
(南西から)



同 (北西から)



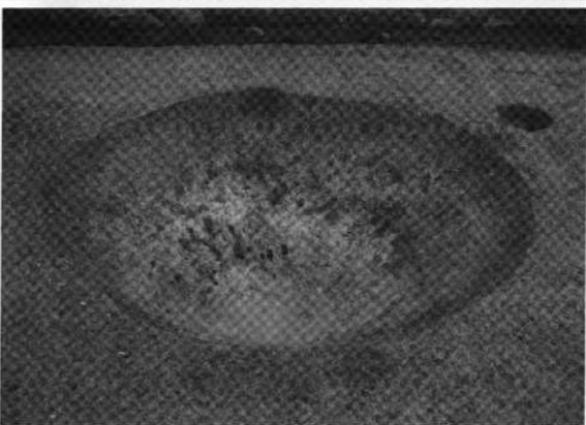
トレンチ全景（東から）



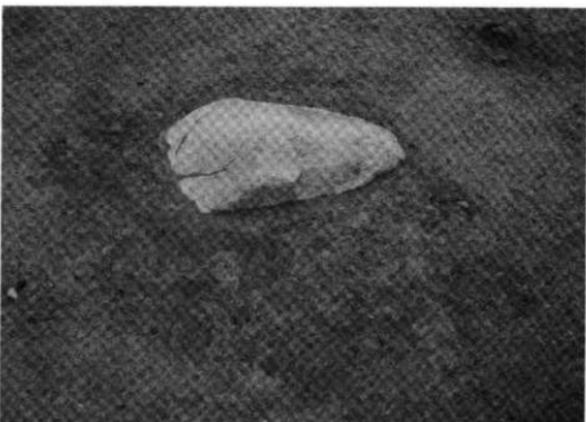
SK-01検出状況（南から）



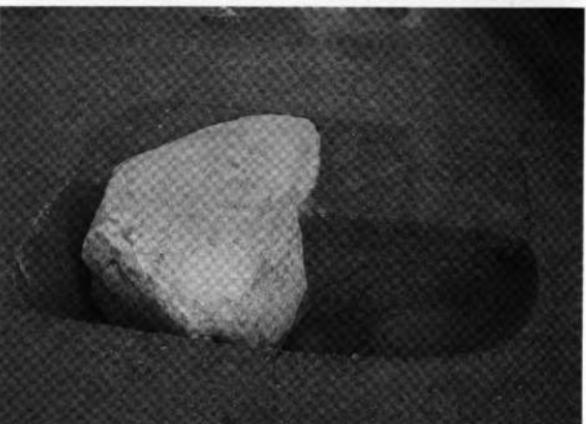
同断面（南から）



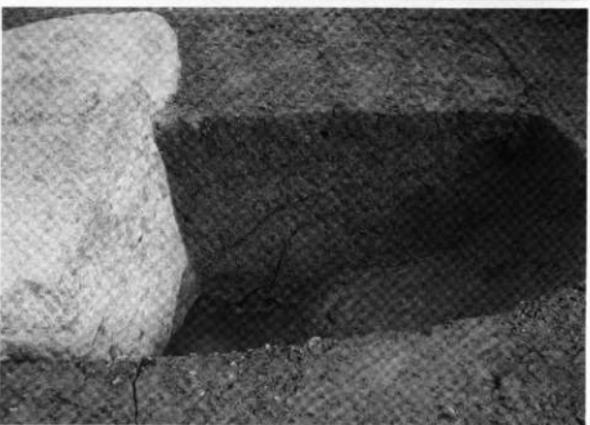
同完掘状況（南から）



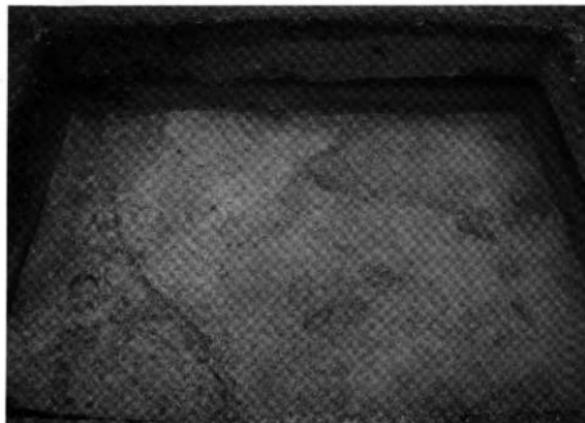
緑石土坑検出状況（南西から）



同断面（西から）



同断面近景（西から）



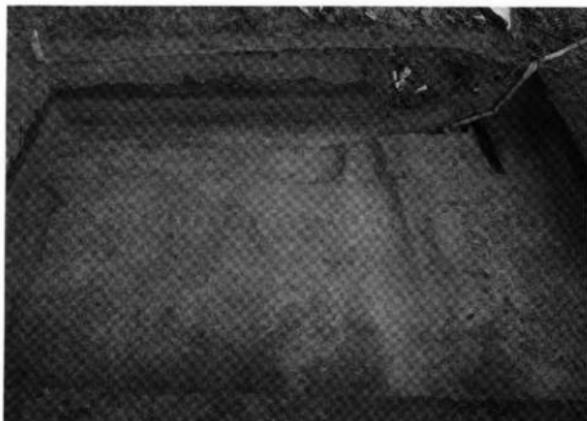
トレンチ全景（東から）



同（西から）



同（北から）



トレンチ全景（西から）



同（東から）



同近景（東から）



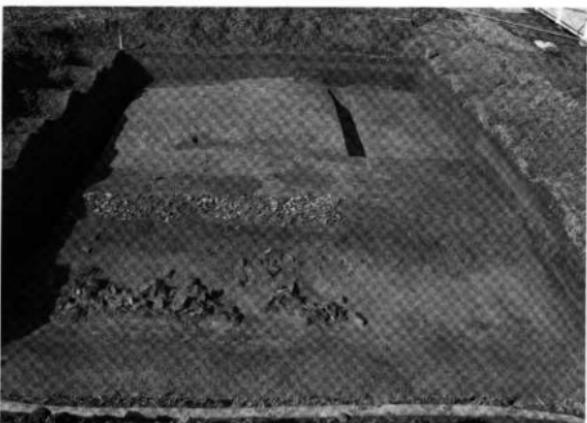
調査前 (東から)



基壇土検出状況 (東から)



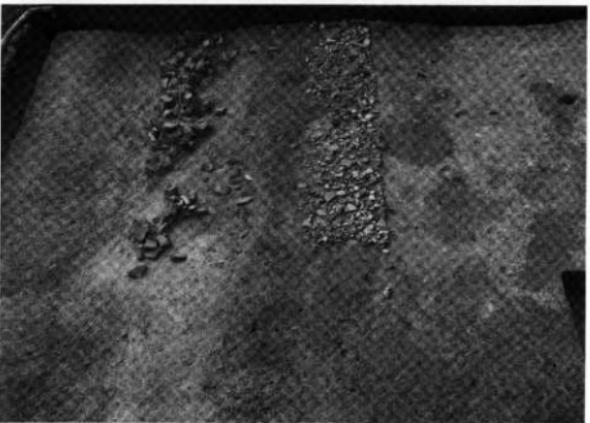
基壇土堆積状況 (北東から)



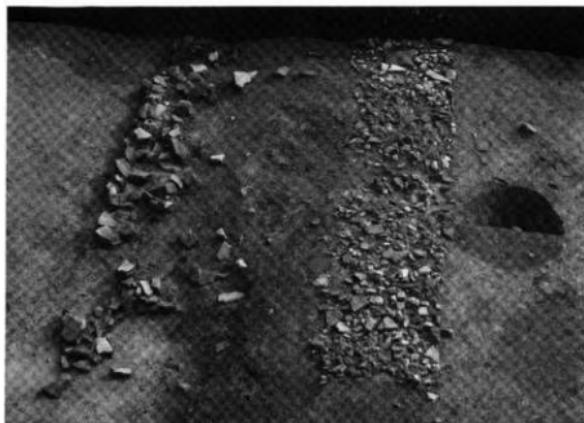
トレンチ全景（東から）



同（北東から）



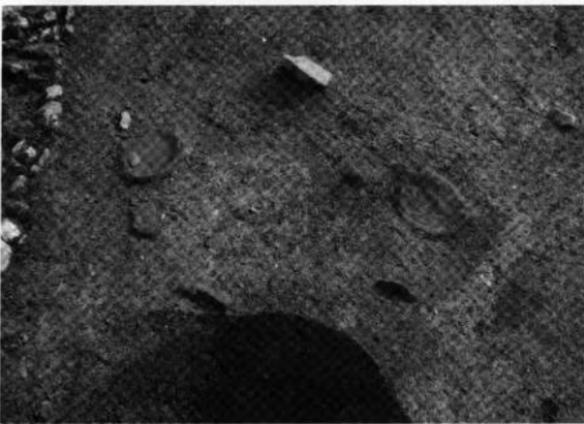
雨落ちの状況（北から）



雨落ち近景（北から）



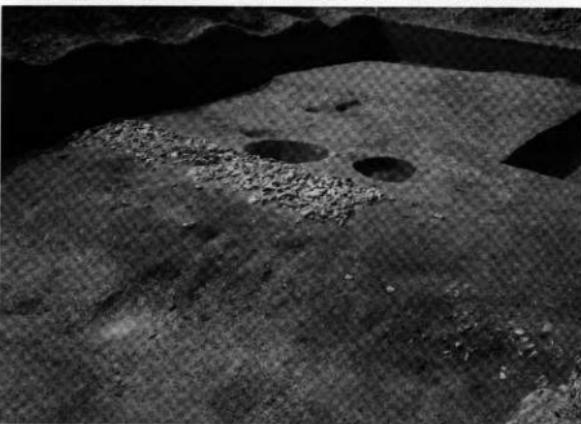
三重圓紋軒丸瓦出土状況  
(北から)



土師皿出土状況（北から）



トレンチ全景（東から）



同（北東から）



雨落ち内軒丸瓦出土状況  
(東から)



トレンチ全景（西から）



トレンチ北側の状況（西から）



同完掘状況（南西から）



トレンチ全景（南から）



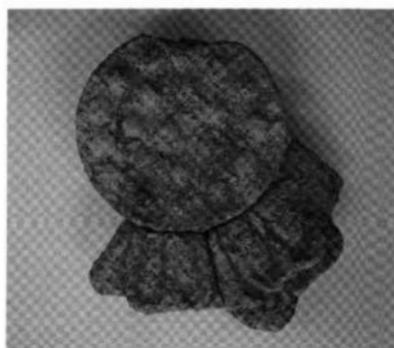
同完掘状況（南から）



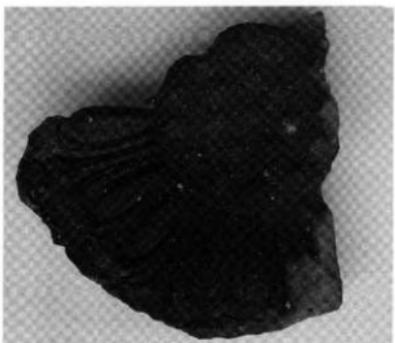
トレンチ北側の状況  
(南西から)



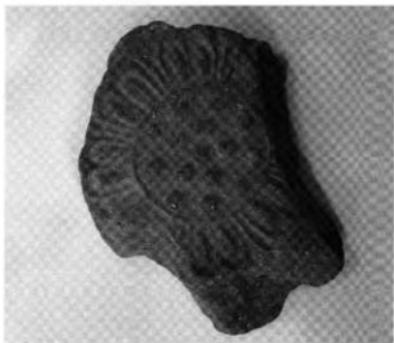
複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦（第11図1）



複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦（第11図2）



複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦（第11図5）



複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦（第11図7）



單弁12弁蓮華紋軒丸瓦（第11図8）



巴紋軒丸瓦（第11図11）



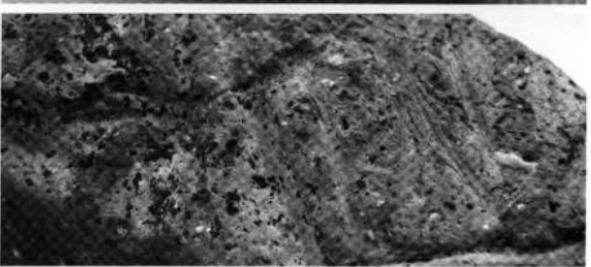
外面



内面



底面



同拓大



凸面



段の状況



同

## 報告書抄録

ふりがな	へいせい 17 ねんどかしばしまいぞうぶんかざいはくつちょうさかいほう 20
書名	平成 17 年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 20
副書名	
巻次	
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	20
編著者名	山下 隆次
編集機関	香芝市教育委員会
所在地	〒 639-0292 奈良県香芝市本町 1397 番地 TEL0745-76-2001
発行年月日	西暦 2006 (平成 18) 年 3 月 31 日

所取遺跡	所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
尼寺北廻寺	奈良県香芝市 尼寺 2 丁目 68-69-169-2.72	292109	143	34 度 34 分 27 秒	135 度 42 分 01 秒	20060110 ～ 20060322	296 m <sup>2</sup>	史跡整備

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項
尼寺北廻寺	寺院跡	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	金堂東側雨落 瓦、須恵器、 上間器、黒色 ト、土坑、 土器、瓦器 素振小滑	瓦、須恵器、 上間器、黒色 土器、瓦器	金堂東側の兩落ちが検出され、金堂の東西軸が確定した。また、北面回廊北側は後乱によって遺構が検出されなかつたが、寺城北限推定地において北面基礎の可能性がある遺構を検出した。

要約	金堂東側の兩落ちが検出されたことにより、金堂の東西軸が 14.7 m であったことが確認され、南北軸であったことが追認された。また、北面回廊北側の講堂推定地は後乱によって遺構が検出されなかつた。しかし、寺城北限推定地で基壇状の遺構が検出されたことにより、ほぼ推定通りの位置に築地が存在すると考えられる。
----	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 20

一平成 17 年度一

2006 (平成 18) 年 3 月 31 日

編集・発行 香芝市教育委員会

〒 639-0292 奈良県香芝市木町 1397 番地

TEL.0745-76-2001 FAX.0745-78-9150

印 刷 株式会社明新社

〒 630-8141 奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地

TEL.0742-63-0661 FAX.0742-63-0660